

H・アーレントの社会学批判と経験の「新しさ」の認識

——「活動」概念における「始まり」に着目して——

日本大学 河合恭平

1 目的

H・アーレントはナチスの出現を経て、経験の「新しさ」に意図的に着目した思想家である。そのことは、第一に、ナチスが「先例のないもの」であったことを主張して独自の全体主義論を展開した点、第二に、彼女の用語である「活動 (action)」によって現われる「新しい」経験を公共性論として展開した点に読み取ることができる。また、彼女は、同時代の社会学が「新しさ」の認識に失敗しているとして批判を展開している。本報告では、アーレントのかかる社会学批判の論理構成を明らかにし、そのうえで彼女の「活動」概念を、「新しさ」を認識するための行為理論の一つとして再解釈し、その理論図式を提示することを目的とする。これにより、経験の「新しさ」を認識する理論のための視座を提示し、テーマセッション【10】に掲げられた問いへの応答が可能となり、なおかつ討論のため素材を提供しうるだろう。

2 方法

アーレントによる社会認識のあり方・方法についての社会学的研究は、近年、ようやく少しずつ着手され始めている。たとえば、ヴェーバー研究者でもある P・ベアはアーレントの全体主義論に実証主義の観点から批判的でありながらも、彼女の社会学批判の妥当性を一定程度認めている。また、P・ウォルシュは社会学が因果連関図式や理念型への還元主義に陥ってしまう問題点の存在をアーレントの批判から読み取っている。本報告ではこれら先行研究を引き継ぎながら、アーレントの社会学批判を行ったテキストとして、『全体主義の起原』(1951)のほか、殊に「宗教と政治」(1953)、「理解と政治」(1954)などを対象に解釈を行う。さらに、「新しさ」を捉える概念として「活動」概念を再解釈するにあたり、『人間の条件』(1958)第5章(「活動」の章)や「歴史の概念」(1958)を対象とし、上記の目的に応じることとする。

3 結果

アーレントが批判の対象としたのは、H・ガースや E・フェーゲリン、また機能主義者による全体主義分析であり、それが、ナチスを官僚制やカリスマ的支配(とその日常化)という理念型への還元陥った点を指摘した。だが、アーレントは理念型それ自体を拒絶していたわけではなく、批判の焦点はその還元主義的な適用にあったものと解釈できる。そしてこの延長上に、行為や行動の因果連関に基づく認識枠組みへの彼女による批判があり、これに対して「活動」概念が提起された。「活動」は「始まり」を扱う点に特徴づけられるが、新しい過程の「始まり」という対象は因果連関では取り扱いにくいと言える。アーレントの議論の利点はここにあり、なおかつ「活動」が公共性の形成ばかりでなく、実は全体主義の出現をも説明しうる概念でもあることを指摘できる。

4 結論

「新しさ」とは、索出手段としての理念型による比較を通じて見出されるものと言えるが、アーレントの議論から、因果連関に基づく分析の場合、分析者は既存の因果連関に基づくことが前提されているゆえに、「新しさ」を既存の枠組みに還元してしまいがちとなる点を指摘しうる。対し、既存の認識枠組みに還元されない「新しさ」自体に照準する「活動」概念は、行為の「予言不可能性」や「無制限性」の特徴から成り、それらが新しい過程の「始まり」を形成する。そして、それら特徴に対し、「約束」の予期から形成される規範理論の役割が、「新しさの先取り」として重要性を持つのである。